

盤石なる「絆」と「財政基盤」の構築

…会員サービスと大学支援の充実化に向けて…

明専会会長 高原 正雄（機43）



新年おめでとうございます。会員の皆様におかれましては、新しい希望を胸によい年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

故郷の九州は、一昨年4月の熊本大地震、そして、昨年7月の九州北部豪雨と、度重なる大被害を受けました。会員関係には大きな被害がなかったことは何よりでしたが、今でも多くの方が不自由な生活を送って居られることに心が痛みます。昨年もまた、日本を代表する企業の不正事件が相次ぎ発生しました。最も大切なお客様の信頼を裏切っ、目先のコストや納期に走るのとは明らかに優先順位エラーであります。日

本のものでづくり「ジャパン・アズ・ナンバーワン」がもはや地に落ち掛かったという感がして悲しくなります。安定経済成長が続いたあと、1991年からの「失われた20年」の間に経済のみならず、経営者や現場のレベルも劣化してしまっただと思えます。さらには、政治家の低レベル言動やマスコミの偏向報道、世界の指導者たちの自国最優先主義がますます拡散されてきました。

そういった状況下で新しい年を迎えています。私どもは新たな希望と目標を定め、明専会の発展に向けて突き進んで参りたいと思えます。まず、明専会の100周年を契機に足した「明専会基盤強化委員会」の2年間の検討と活動により、会員の絆強化の兆候と会の財政基盤構築の方向が具体的に見えつつあります。会員の絆強化の兆候について、具



図1 明専会の伝統的な絆の好循環

らに発展的に前進させ盤石な会員の絆を構築させていきたいと思えます。会の財政基盤構築の方向性については、従前の会費納入会員の勧誘活動の反省を踏まえ、新たに新社会人キャンペーンを展開してきました。加えて、入学時終身会費制の導入検討などを精力的に進めておりますが、これは会費制度の大きな変革でもあり、その実現に向けて大学と協調して全力で取り組みたいと思えます。

体的には、会員の新しい絆として、学生会員の明専会への帰属性や女性会員の明専会活動、若手会員の自律的交流が目立つようになりました。また、年長会員の啓発活動は、従前に倍する活発なものになっております。加えて、九州工大と明専会の組織的に連動した事業活動は文科省からも高く評価されています。さらに会員の絆のツールでもある明専会報の質は近年かなり高くなってきています。加えて、新しく展開したFacebook（明専会公式Facebook）の活用によるコミュニケーションも著しく増えてきました。同窓の絆が

あちこちで芽生え始めています。さ

図1は、皆様に何度もお示ししておりますが、明専々九州工大へ至る永い歴史の中で継承された明専会会員の「強い絆」と「燃えるような母校愛」の伝統は、是非とも次世代へと繋げていかねばなりません。現執行部は、本年も一丸となって、盤石なる「絆」と「財政基盤」の構築に向けて活動を進めて参ります。会員の皆様におかれましては、倍旧なるご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いたします。

末筆になりましたが、社会の平和と皆様のご繁栄、ご多幸を祈念して、年頭のご挨拶といたします。

（いすゞ自動車・理事）

豊かな価値の共有を目指して

九州工業大学 学長 尾家 祐二



新年おめでとうございます。

明専会および会員の皆様方には、
 本学の教育研究活動への格別のご理解並びに多大なるご支援を賜り誠に厚く御礼申し上げます。

著しい技術革新とその社会への浸透が、大きな社会変革の原動力となりつつあります。特に、計算機の処理能力の飛躍的な向上とそれを背景にしたAIおよびビッグデータ活用は、産業分野のみならず我々の社会生活においても大きな変革をもたらしています。社会は、多様な価値を包含しており、それらは時間とともに変化しています。このような状況において、九州工業大学は、未来を

見据えて、大学の社会的価値を高め、新たな価値を創造するために「未来を思考する『モノづくり』と『ひとづくり』」を行って参ります。

学生諸君は、昨年も学生プロジェクトに積極的に応募し、平成29年度は19件が採択になりました。その中でも平成28～29年度安川電機プロジェクトとして採択された『Hibikino Musashi@home』は名古屋で開催された世界大会「RoboCup 2017」において、生活支援ロボットの性能を競うリーグにおいて優勝し、また、『衛星開発プロジェクト』が開発した超小型人工衛星が昨年1月に宇宙空間に放出されるなど大きな成果を残しています。

教育の国際化についても継続して推進しています。平成28年度には500名を超える学生が海外での学習を経験し、平成29年度も引き続き多くの学生が企業インターンシップを含め海外で貴重な経験をしています。ま

た、宇宙工学国際コースのガーナ、モンゴル、バングラデシュ、ナイジェリア、日本の学生が開発した5機の超小型人工衛星が昨年7月に宇宙空間に放出されました。ガーナ、モンゴル、バングラデシュにおいては、初の衛星開発であり、まさに国を挙げて喜んでいただきました。そしてこのような多様なチームによる工学教育が評価されエアバスの Diversity Award を獲得しました。

さらに、今年度、本学の学生を海外の機関の教員と共同で指導する国際協働研究指導支援制度を新たに設け、7件採択しました。

研究分野においては、大学組織レベルで国際共同研究プロジェクトを支援する制度を開始しました。台湾科技大学との間で5件、マレーシアプトラ大学との間で3件を採択し、共同研究が開始されています。11月には、マレーシアにおいて、共同研究のキックオフ会議があり、継続的で豊かな大学間連携が築かれることを期待しています。

今年度、株式会社SUMCO様及びパナソニック株式会社様にご尽力いただき、初めて2つの共同研究講座

を新設することができました。キャンパスがさらに多様化し、新たな相互作用が生じることを期待しています。

本学卒業生とのネットワークも、本学の資産と理解し、海外の研究機関および高専で勤務している卒業生との共同研究を平成28年度から支援しています。昨年度は7件、今年度には13件を採択しました。昨年、モンゴル、ベトナム、マレーシアを訪問した際に、卒業生との懇談の機会を設け、近況を知ることができ大変嬉しく思いました。今後、更にネットワークを広げていきたいと思っています。

また、職員が誇りをもつて働ける職場づくりにも取り組んでいます。このような様々な教育、研究活動を推進し、さらには、産業界、報道機関、自治体との対話の機会を増やし、本学の社会的価値をさらに高めるとともに、学外の多様な組織と豊かな価値を共有していきたいと考えております。

最後になりましたが、皆様方が、多くの良き機会に恵まれ、実り多き年となりますことを祈念いたします。今年もよろしくお願い申し上げます。